

山椒は小粒でも...

Vol.11

「I ♥ 自転車」



「こうみえても、自転車好きです」と言いながらも自転車で乗れるようになったのは、小学校3年生の頃。同級生の中では遅かったほうだと思えます。人に見られると恥ずかしいので八反田にある工場の裏の空地で隠れて練習してやっと乗れるようになりました。

中学校は加茂中だったのですが、安楽島から自転車通学です。当時の男子は6年生になると通学用のギア車をかうのが流行でした。5段変速、方向指示のウインカーやスピードメーター付で値段は4万円前後でした。なかには時計が付いたものもありました。

そのころから自転車好きだったのでしょう。友人と3人でパールロードを通って、大王崎、御座、今はなき奥志摩フェリーに乗って浜島へ渡り、磯部へと一日100km漕いだり。ある時は一人で伊勢湾フェリーに乗り、渥美半島

へサイクリングに行ったり。高校生になってからは、伊勢へ通うのに自宅と鳥羽駅を往復。

学生時代に上京する時に帯同じ、東京↓埼玉↓東京と引っ越しするも必ず一緒に生活。

就職しても東京↓埼玉↓名古屋と連れまわし、ようやく17年目に再び故郷の鳥羽へ帰ってきて役目を終えました。

それからしばらくは娘たちが使い終えたママチャリを利用していましたが、数年前、ひよんなことから、ある人からツーリング用の中古自転車を譲ってもらいました。

しかも「中村さんなら大事に乗ってくれそうなので・・・」との、嬉しい言葉とともに。

マウンテンバイクはタイヤが太くてクッションも良く、路面にへばりつくような柔らかな乗り心地ですが、ツーリ

ングタイプの自転車は、タイヤも極細で堅く、まるで円盤に乗っているような、ゴンゴンした路面の感触です。接地面との抵抗が全く感じられないので、「あっ、これなら伊勢まで走れそう」と思ったのが第一印象でした。

とはいえ、なかなか乗る機会もなく、宝の持ち腐れになっっていました。一念発起して、通勤で活用しようと思っ

ています。天気の良い日、荷物のない日を選んで、まずは週一回のペースで3月から始めました。昔のようにとはいかないもので、特に視野が狭く、近くにしか注意が払えない状態です。また、スポーツ自転車はお尻が痛いのが難点です。

まだ始めたばかりで泣き言のようですが、一方、道すがら声を掛けられて話し込んだり、気ままに自転車を止めて写真を撮ったり、通勤途中を満喫しています。ふらふら走っているのを見かけたら、喝を入れてください。



Vol.169 教育委員会生涯学習課 ☎ 1268

「スポーツの力」 支える・支えられて生きる

「形あるものの中には、必ずそれを支えてくれるものがある。人はその明かりを見るけれども、燭台(ろうたな)ろうそくをたてる台は忘れる。しかし、燭台はなければならぬものだ」(1964年東京オリンピックで優勝した女子バレーボールの大松監督の言葉)

平昌オリンピック・パラリンピックは多くの人に感動を与え、閉幕しました。

「たくさんの人に支えられて結果を出すことができました。感謝しています」選手の数々が語った言葉です。

4歳の時、横断性脊髄炎を患い、車いす生活の中、努力の末、最多のメダルを獲得した村岡桃佳選手。「こんなにメダルが取れる子に成長していたなんて」と母・操さんの涙と喜

びの声に成長を見守ってきた姿がありました。

6大会連続出場した新田佳浩選手は、8年ぶりのメダル獲得に、長く支えてくれた妻と、二人の息子に「がんばった姿を見せられた」と語りました。

オリンピックから、パラリンピックを目指すことになったきっかけを成田緑夢選手は「私が病院で頑張っている姿に勇気をもたらしたという障がいのあるかたからのメッセージに心を動かされ、自分がスポーツをすることで誰かを励ませるかもしれないと思えるようになり、パラリンピックに夢をかけた。今は僕なりにスポーツをする意味を考えるようになった。障がいのあるかたや、けがをしたかた、そして子どもたちに『夢』と『希望』を諦めないことの大切さを伝えることが夢です」と語っています。

半世紀の時を経て「支える・支えられる」「支え合って生きる」そんな姿をたくさん見ることができました。人は一人では生きられない。お互いが相手を認め合い、人に優しい世の中にしていきましょう。